

教育介入による学生の専門職における管理栄養士・栄養士の職業観への影響

町田和恵¹⁾, 大見奈緒子²⁾, 花木秀子³⁾, 油田幸子⁴⁾, 東博文⁵⁾,

¹⁾鹿児島県立短期大学生活科学科, ²⁾鹿児島純心女子短期大生活学科, ³⁾元鹿児島純心女子短期大生活学科,

⁴⁾鹿児島厚生連病院栄養管理科, ⁵⁾鹿屋体育大学体育学部

Effect of Educational Intervention to the Students' View of the Profession of Dietitian

Kazue MACHIDA, Naoko OMI, Hideko HANAOKI, Sachiko ABURADA
and Hirofumi HIGASHI

The new students in food and nutrition major usually enter colleges with expectations for the profession of dietitian. The profession image, a charm of the profession, required qualities which the students think about are considerably different from those which the dietitians think about. In this research, to promote the skilful and the society requested dietitians when graduating, we verified the effect of educational intervention of two years in junior colleges.

We conducted the questionnaire survey of the view of the profession of dietitian for 82 students of the junior colleges at the entering in April, 2008, and at the graduating in February, 2010. We compared the consciousness of the profession between at entering and at graduating.

Although 67.1% of the students felt the charm in the dietitians as a profession at entering, the figure decreased about 30% to 43.9% at graduating. As a quality for dietitian, the figure of "Not worrying over trifles" increased from 25.6% to 47.6%, and it shows the effect of educational intervention. In uneasiness of working as the dietitian, "Lack of professional knowledge" rose from 69.5% to 91.5%, "Interpersonal relationship" rose from 37.8% to 67.1% remarkably, and it also shows the effect of educational intervention.

As mentioned above, the significant effects of the educational intervention to the recognition of qualities for the profession of dietitian of the students were observed. It shows the students recognized the view of the profession of dietitian with reality, and they were transformed to the recognition of the important quality as the dietitian, by having the relations with incumbent dietitians through the internship outside the school.

キーワード: Keywords: 栄養士 dietitian 教育介入 educational intervention

*1 鹿児島県立短期大学 生活科学科食物栄養専攻

(〒890-0005 鹿児島市下伊敷町1-52-1, Kagoshima Prefectural College)

1. 緒言

近年、大学生の中には、明確な目的意識をもたずに入学してくる学生があり、卒業時においても進学や就職をしない者が15%程度見られる¹⁾。また、厚生労働省の統計によれば、新規大学卒業者は就職後3年以内に3人に1人が離職している²⁾。こうした状況の中にあつて、文部科学省ではキャリア教育のプランに基づき、若者が望ましい勤労観、職業観を身に付け、明確な目的意識をもって職に就くとともに、仕事を通じて社会に貢献することができるよう、キャリア教育の充実などに取り組んできているところである。栄養士養成施設校においても、卒業後、栄養士として就職するのは、約50%の2人に1人で、短期大学の場合は、その他に大学編入や栄養士以外の職業に就いている³⁾。

管理栄養士・栄養士の養成をめぐるここ10年の動向をみると、平成12年4月の栄養士法改正では、管理栄養士の業務を明確に定義し、さらに社会のニーズとしては、専門分野の多様化・高度化に対応することが求められるなど、管理栄養士・栄養士を取り巻く社会環境は急速に変化してきている。平成17年10月には「栄養ケア・マネジメント」が、翌平成18年4月には「栄養管理実施加算」、平成20年4月には新しい医療制度「特定健診・特定保健指導」、平成22年4月から「栄養サポートチーム加算」と、次々に新しい施策が実施され、「栄養管理」の流れは、医学・医療の一端を担うものとして評価されるようになった。

一方、学問の場では、平成14年に管理栄養士・栄養士の新たな養成課程が施行され、社会が必要とする現場に則した栄養士を育成するように、より高度な知識や技術を養成することが求められている。

筆者らのこれまでの研究⁴⁾では、入学時の学生の意識と現職管理栄養士や栄養士間に、専門職への魅力・やりがい意識や必要な資質・能力に対する幾分かの隔たりを認めた。

そこで今回は、栄養士養成施設校における現場の求める即戦力となる栄養士の育成を目的とした2年間の教育介入の効果を検証した。

2. 方法

平成20年4月下旬に栄養士養成課程へ入学した学生85名、現職の管理栄養士156名、栄養士110名を対象に、職業観、職業に必要と認識する資質および能力などに関連する質問調査を行った。2年後の平成22年2月、再び同学生82名に対して、入学時と同内容の質問調査を実施し、この間における教育介入の効果を比較検討した。

調査方法は、質問紙による自己記入方式とし、学生は集合法直接、現職の管理栄養士と栄養士は郵送法で実施した。質問項目中で明確な意思を示す『ある』と回答したグループを肯定回答群とし“それ以外”の『どちらかといえばある』『どちらかといえばない』『ない』と回答したグループは否定回答群として2つに分類した。

なお、入学時においては管理栄養士と栄養士の業務内容に関する深い知識がないことから、管理栄養士と栄養士を区別することなく、一括して専門職とみなす質問形式とした。

回収されたデータはスクリーニングの後に、度数分布とその割合などの粗集計を行い、肯定度数とその割合は、95%信頼区間（95%CL）を求め、入学時と卒業時における比較を行った。

さらに、専門職の魅力・やりがいを基準変数とし、専門職に必要とされる資質および能力の項目を説明変数としてクロス解析し、オッズ比とその95%信頼区間（95%CL）を求めて関連性を検討した。また、入学時と卒業時の一致率は分母を入学時の肯定者数として、卒業時の肯定者数を一致数とし、その95%信頼区間（95%CL）を求め、入学時と卒業時を比較検討した。

なお、これらの統計処理は、統計ソフト「HALWIN」を用いた。

3. 結果

(1) 卒業後の栄養士就業希望者

表1が示すように「卒業後の栄養士就業希望者」は、入学時が82名中44名（53.7%）の就業希望者であったのに対し、卒業時も42名（51.2%）を示し、有意差は認められない。その入学時44名のうち26名は卒業時も栄養士を就業希望しており、その一致率は59.1%を示している。

(2) 専門職に対するやりがい意識および魅力

管理栄養士・栄養士の専門職に対する現職者の“やりがい”意識と、学生にとっての“魅力”は同意識と考え、その割合を図1に示した。やりがいを感じている現職の管理栄養士が55.8%を示すのに対し、栄養士は36.4%を示し、管理栄養士に比較し、栄養士は19.4%の低率である。

一方、学生における専門職に対する魅力は、入学時が67.1%で、卒業時は43.9%を示し、約25%減少している。

表1 卒業後の栄養士就業希望者

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
希望する	44	53.7	(42.9, 64.5)	42	51.2	(40.4, 62.0)	-2	26	59.1	(44.6, 73.6)

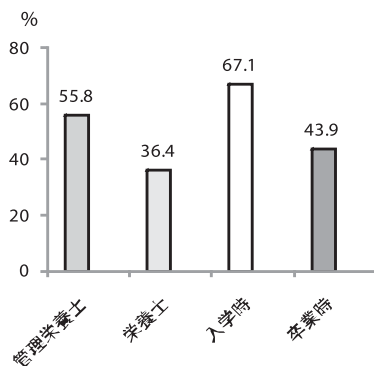


図1 専門職に対するやりがい意識と魅力の比率

表 2 は、教育介入の影響として、入学時と卒業時における「専門職に対する魅力」状況と、その一致率を示している。入学時には55名の67.1%が専門職に魅力を感じていたが、卒業時は36名の43.9%と、有意な低下を示している。その一致率は33名の60%を占めている。

(3) 栄養士就業希望と専門職に対する魅力との関連

表 3 に入学時と卒業時における「栄養士就業希望」と「専門職に対する魅力」との関連を示す。入学時には38名の46.3%が栄養士を希望し、かつ職業に魅力を感じていたが、卒業時には24名の29.3%と減少している。その一致率は17名の44.7%と 5 割に達していない。

(4) 学生が将来働く目的

表 4 に「将来働く目的」について、入学時と卒業時の回答割合と一致率を示す。将来働く目的事項として「収入を得るため」「自己実現」「社会貢献」「資格を活かす」「成人としての義務」の 5 項目から複数選択方式とした。「収入を得るため」は、他項目に比較し入学時80.0%、卒業時90.2%とともに最も高い割合を示し、入学時より卒業時の方が約10%の高値である。その他の項目では、入学時には「自己実現」が36.6%、「社会貢献」が35.4%、「資格を活かす」が32.9%、「成人としての義務」が28.0%と、いずれも 3 割前後を示している。

一方、卒業時も入学時と同様な回答傾向を示し、ほとんどが 1 割前後上昇していたが、「社会貢献」のみが7.4%減少していた。いずれの項目においても、入学時、卒業時、一致率ともに統計的な有意差は認められない。

表 2 入学時と卒業時における「専門職に対する魅力」割合の比較

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
魅力を感じる	55	67.1	(56.9, 77.2)	36	43.9	(33.2, 54.6)	-19	33	60	(47.1, 72.9)

表 3 入学時と卒業時における「栄養士就業希望」と「専門職に対する魅力」との関連

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
栄養士就業希望×魅力を感じる	38	46.3	(35.5, 57.1)	24	29.3	(19.4, 39.1)	-14	17	44.7	(28.9, 60.5)

表 4 入学時と卒業時における「将来働く目的」項目の割合比較

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
収入を得るため	66	80.0	(71.9, 89.1)	74	90.2	(83.8, 96.7)	8	63	95.5	(90.4, 100)
自己実現	30	36.6	(26.2, 47.0)	40	48.8	(38.0, 60.0)	10	19	63.3	(46.1, 80.6)
社会貢献	29	35.4	(25.0, 45.7)	23	28.0	(18.3, 37.8)	-6	13	44.8	(26.7, 62.9)
資格を活かす	27	32.9	(22.8, 43.1)	34	41.5	(30.8, 52.1)	7	17	63.0	(44.7, 81.2)
成人としての義務	23	28.0	(18.3, 37.8)	28	34.1	(23.9, 44.4)	5	15	66.2	(45.8, 84.7)

(5) 栄養士養成短期大学の入学意義

表5は入学時と卒業時の「栄養士養成短期大学の入学意義」の回答割合と一致率を示す。栄養士養成校への入学の意義として「基礎的知識の習得」「専門的知識の習得」「学歴や資格の取得」「職業的技能の習得」「自分の才能を伸ばす」などの11項目から複数選択方式とした。入学時に最も高かったのは「専門的知識の習得」の89.0%で、次いで「学歴や資格の取得」74.4%、「職業的技能の習得」62.2%であったが、卒業時においても同様の傾向がみられ、いずれの項目においても教育介入による効果は認められず、一致率においても有意性は認められない。

(6) 短期大学における「自らが目指す学生像」とその達成感

表6には入学時と卒業時における「どのような学生になりたいか」の項目別回答割合と一致率を示している。

「どのような学生になりたいか」という設問に対して、「学校の勉強以外で幅広く知識を持つ」「意見を発言できる」「責任を果たす」「失敗を恐れず未知に挑戦」「リーダーシップがある」「その他」の6項目をカテゴリとし、複数の選択回答方式で得られた回答割合を示している。設問6項目の中で、卒業時が入学時より高い割合を示したのは、「学校の勉強以外で幅広く知識を持つ」「意見を発言できる」「失敗を恐れず未知に挑戦」そして「その他」の4項目である。いずれも5割以下の回答割合であるが、最も高い割合を示したのは入学時においては「責任を果たす」の47.6%であり、卒業時は「学校の勉強以外で幅広く知識を持つ」の45.1%であった。

また、「学校の勉強以外で幅広く知識を持つ」は入学時に30.5%で、卒業時には増加して45.1%を示したが、統計的な有意差は認められない。また、これら以外にも、卒業時が入学時より高くなっている項目もあるが、有意差は認められない。

一方、「責任を果たす」の割合は入学時の47.6%から、卒業時には24.4%へと有意に低下している。

表5 入学時と卒業時における「栄養士養成短期大学の入学意義」割合の比較

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
基礎的知識の習得	36	43.9	(33.2, 54.6)	41	50.0	(39.2, 60.8)	5	26	72.2	(57.6, 86.9)
専門的知識の習得	73	89.0	(82.3, 95.8)	68	82.9	(74.8, 91.1)	-5	64	87.7	(80.1, 95.2)
学歴や資格の取得	61	74.4	(64.9, 83.8)	60	73.2	(63.6, 82.8)	-1	45	73.8	(62.7, 84.8)
職業的技能の習得	51	62.2	(51.7, 72.7)	42	51.2	(40.0, 62.0)	-9	32	62.7	(49.5, 76.0)
人間としての成長	42	51.2	(40.0, 62.0)	34	41.5	(30.8, 52.1)	-8	25	59.5	(44.7, 74.4)
友情をはぐくむ	27	32.9	(22.8, 43.1)	30	36.6	(26.2, 47.0)	3	12	44.4	(25.7, 63.2)
自分の才能を伸ばす	15	18.3	(9.9, 26.7)	16	19.5	(10.9, 28.1)	1	9	60.0	(35.2, 84.8)
先生の人柄や生き方を学ぶ	4	4.9	(0.2, 9.5)	10	12.2	(5.1, 19.3)	6	2	50.0	(1.0, 99.0)
自由な時間を楽しむ	4	4.9	(0.2, 9.5)	11	13.4	(6.0, 20.8)	7	3	75.0	(32.6, 100.0)
特に意義はない	2	2.4	(0.0, 5.8)	4	4.9	(0.2, 9.5)	2	1	0.0	(0.0, 0.0)
働かなくてよい	0	0.0	(0.0, 0.0)	2	2.4	(0.0, 5.8)	2	0	50.0	(0.0, 100.0)

(7) 学生が専門職に必要と考える資質

図 2 には、学生が「管理栄養士・栄養士の専門職に必要と考える資質」として「責任感」「人間性」「体力」「精神力」などの16項目より複数選択方式で回答した割合を示す。提示された16項目の中で「体力」「積極性」「向上心」「明るさ」「勤勉努力家」「前向き」「クヨクヨしない」「地道」の8項目は卒業時の割合が高くなっているが、「責任感」「精神力」「冷静沈着」「礼儀作法」「外向性」「穏やか」の6項目は、むしろ低下傾向にある。また、「人間性」「優しさ」は全く同じ割合を示し、「向上心」「勤勉努力家」「クヨクヨしない」「地道」などは卒業時に顕著な増加を示していた。

表 7 には、専門職に必要と考える資質項目の入学時、卒業時の回答割合とその一致率を示す。卒業時において顕著な増加を示した「向上心」「勤勉努力家」「クヨクヨしない」「地道」4項目の中でも、「クヨクヨしない」のみが有意差を認めた。一致率は、いずれの項目間においても有意差を認めないが、「冷静沈着」「礼儀作法」「外向性」「優しさ」「穏やか」は5割以下の低い一致率を示している。

(8) 専門職に対する“魅力”および“やりがい”と専門職に必要な資質との関連

学生には専門職に対する“魅力”の有無を、現職の管理栄養士と栄養士には仕事に対する“やりがい”の有無を基準変数とし、「責任感」「人間性」「地道」「精神力」などを説明変数としてクロス解析を行った結果を表 8 に示す。入学時の学生で管理栄養士・栄養士の専門職に“魅力”を感じている者は、その職業に必要な資質として①責任感、②明るさ、③積極性を上位に挙げているがいずれにも有意な関連性が認められない。

しかし、現職の管理栄養士で自らの仕事にやりがいを感じている者は、必要資質として①人間性、②責任感、③地道を挙げ、有意水準に達したのは①人間性であった。

栄養士の場合は、①責任感、②明るさ、③精神力を自らの仕事を行うにあたって必要な資質として上位に挙げ、有意水準に達した項目は②明るさであった。

表 6 入学時と卒業時における「自らが目指す学生像」の割合比較

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
学校の勉強以外に幅広い知識を持つ	25	30.5	(20.5, 40.5)	37	45.1	(34.4, 55.9)	12	14	56.0	(36.5, 75.5)
意見を発言できる	5	6.1	(0.9, 11.3)	12	14.6	(7.0, 22.3)	7	1	20.0	(0.0, 55.1)
責任を果たす	39	47.6	(36.8, 58.4)	20	24.4	(15.1, 33.7)	-19	11	28.2	(14.1, 42.3)
失敗を恐れず未知に挑戦	9	11.0	(4.2, 17.7)	15	18.3	(9.9, 26.7)	6	5	55.6	(23.1, 88.0)
リーダーシップがある	2	2.4	(0.0, 5.8)	1	1.2	(0.0, 3.6)	-1	0	0.0	(0.0, 0.0)
その他	1	1.2	(0.0, 3.6)	4	4.9	(0.2, 9.5)	3	0	0.0	(0.0, 0.0)

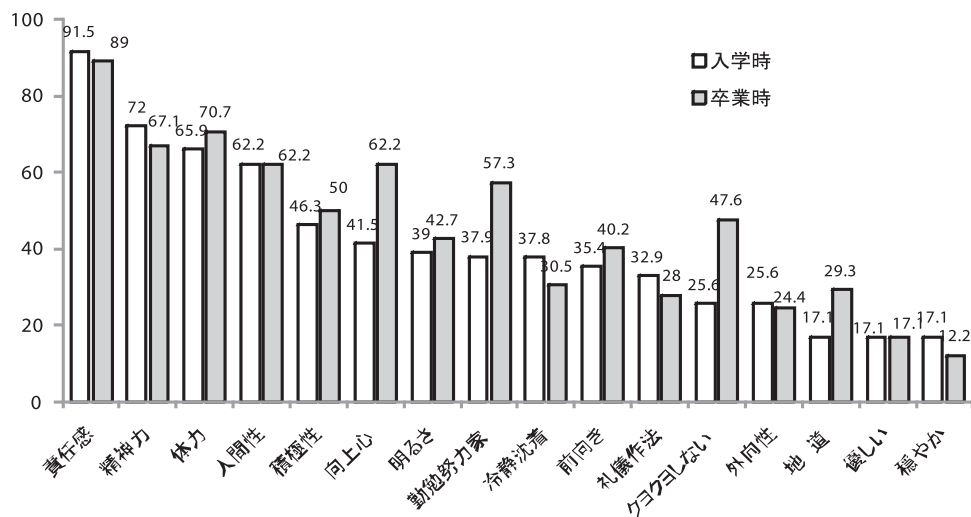


図2 入学時と卒業時における「専門職に必要なと考える資質」割合の比較

表7 入学時と卒業時における「専門職に必要なと考える資質」と教育介入との関連

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
責任感	75	91.5	(85.4, 97.5)	73	89.0	(82.3, 95.8)	-2	68	90.7	(84.1, 97.3)
精神力	59	72.0	(62.2, 81.7)	55	67.1	(56.9, 77.2)	-4	44	74.6	(63.5, 85.7)
体力	54	65.9	(55.6, 76.1)	58	70.7	(60.9, 80.6)	4	40	74.1	(62.4, 85.8)
人間性	51	62.2	(51.7, 72.7)	51	62.2	(51.7, 72.7)	0	34	66.7	(53.7, 79.6)
積極性	38	46.3	(35.5, 57.1)	41	50.0	(39.2, 60.8)	3	26	68.4	(53.6, 83.2)
向上心	34	41.5	(30.8, 52.1)	51	62.2	(51.7, 72.7)	17	26	76.5	(62.2, 90.7)
明るさ	32	39.0	(28.5, 49.6)	35	42.7	(32.0, 53.4)	3	19	59.4	(42.4, 76.4)
勤勉努力家	31	37.8	(27.3, 48.3)	47	57.3	(46.6, 68.0)	16	20	64.5	(47.7, 81.4)
冷静沈着	31	37.8	(27.3, 48.3)	25	30.5	(20.5, 40.5)	-6	12	38.7	(21.6, 55.9)
前向き	29	35.4	(25.0, 45.7)	33	40.2	(29.6, 50.9)	4	18	62.1	(44.4, 79.7)
礼儀作法	27	32.9	(22.8, 43.1)	23	28.0	(18.3, 37.8)	-4	13	48.1	(29.3, 67.0)
クヨクヨしない	21	25.6	(16.2, 35.1)	39	47.6	(36.8, 58.4)	18	15	71.4	(52.1, 90.7)
外向性	21	25.6	(16.1, 35.1)	20	24.4	(15.1, 33.7)	-1	9	42.9	(21.7, 64.0)
地道	14	17.1	(8.9, 25.2)	24	29.3	(19.4, 39.1)	10	9	64.3	(39.2, 89.4)
優しい	14	17.1	(8.9, 25.2)	14	17.1	(8.9, 25.2)	0	6	42.9	(16.9, 68.8)
穏やか	14	17.1	(8.9, 25.2)	10	12.2	(5.1, 19.3)	-4	5	35.7	(10.6, 60.8)

表 8 専門職に対する“魅力”および“やりがい”と専門職に必要と考える資質との関連

入学時→管理栄養士・栄養士 (n=56/85)			管理栄養士→管理栄養士 (n=87/156)			栄養士→栄養士 (n=40/110)		
項目	f (%)	【オッズ比(95%CL)】	項目	f (%)	【オッズ比(95%CL)】	項目	f (%)	【オッズ比(95%CL)】
①責任感	54 (96.4)	[5.6 (0.9, 45.5)]	①人間性	80 (92.0)	[3.2 (1.5, 6.9)]	①責任感	39 (97.5)	[8.9 (1.1, ∞)]
②明るさ	26 (46.4)	[2.1 (0.7, 6.3)]	②責任感	84 (96.5)	[2.3 (0.8, 6.5)]	②明るさ	24 (60.0)	[2.4 (1.0, 5.7)]
③積極性	29 (51.7)	[2.0 (0.7, 5.7)]	③地道	63 (72.4)	[1.7 (0.7, 4.0)]	③精神力	33 (82.5)	[2.2 (0.8, 6.3)]

(9) 学生が専門職に必要と考える能力

学生が専門職に必要と考える能力の11項目を提示した。図3が示すように、入学時に比較し、5割以上の回答割合を示す項目は「知識」「調理技術」「コミュニケーション能力」「献立作成能力」「指導力」「臨機応変」「協調性」「人前で話す能力」の8項目である。

卒業時が入学時より増加している項目は、「コミュニケーション能力」「臨機応変」「社交能力」「統率力」「OA能力」の5項目であり、中でも顕著な増加を示している項目は「臨機応変」のみである。

一方、これらの項目の入学時と卒業時の回答割合、その一致率を比較して示したのが表9である。表9で示されるように5割以上を占めた項目、入学時に比べて増加した項目や減少した項目、そして卒業時に顕著な増加を示した項目が見られたが、有意な関連性は認められない。入学時と卒業時の回答の一致率は、それぞれの項目間に有意差を認めないが相対的に高い傾向を示している。しかし、「OA能力」「統率力」「社交能力」はかなり低い一致率を示している。

(10) 専門職に対する“魅力”および“やりがい”と専門職に必要な能力との関連

学生には専門職に対する“魅力”の有無を、現職管理栄養士と栄養士には仕事に対する“やりがい”の有無を基準変数とし、「指導力」「調理技術」「知識」「コミュニケーション能力」などを説明変数としてクロス解析を行った結果を表10に示す。

入学時の学生で管理栄養士・栄養士という職業に魅力を感じている者は、その職業に必要な能力として①指導力、②調理技術、③知識を上位に挙げ、有意水準に達した項目は①指導力であった。

管理栄養士で自らの仕事にやりがいを感じている者は、必要能力として①指導力、②コミュニケーション能力、③知識を上位に挙げていたが、有意な関連性は認められない。

栄養士の場合は、①調理技術、②コミュニケーション能力、③知識を自らの仕事を行うにあたって必要な能力として上位に挙げていたが、有意な関連性は認められない。

(11) 学生が思う「栄養士として働く際の不安なこと」

図4は、学生が「将来、栄養士として働く際の不安なこと」の項目として、「知識のなさ」「体力・精神力の自信のなさ」「人間関係」「賃金」「1日の就業時間が長い」の5項目を提示し、複数選択回答による方式で得られた結果を示したものである。5項目の中で卒業時に顕著な増加を示している項目は「知識のなさ」と「人間関係」であるが、一方、顕著な減少を示す項目は「体力・精神力の自信のなさ」である。

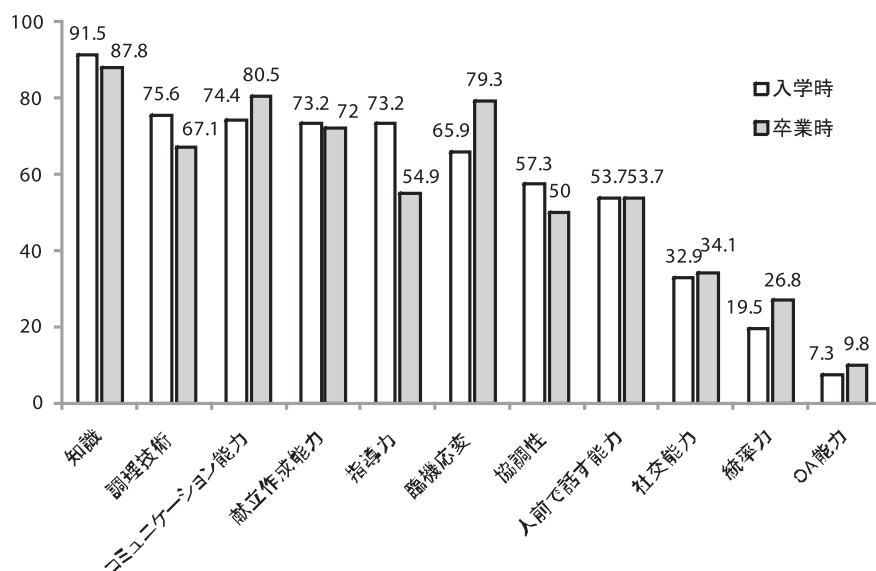


図3 入学時と卒業時における「専門職に必要と考える能力」割合の比較

表9 入学時と卒業時における「専門職に必要と考える能力」と教育介入との関連

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
知識	75	91.5	(85.4, 97.5)	72	87.8	(80.7, 94.9)	-3	67	89.3	(82.3, 96.3)
調理技術	62	75.6	(66.3, 84.9)	55	67.1	(56.9, 77.2)	-7	45	72.6	(61.5, 83.7)
コミュニケーション能力	61	74.4	(64.9, 83.8)	66	80.5	(71.9, 89.1)	5	55	90.2	(82.7, 97.6)
献立作成能力	60	73.2	(63.6, 82.8)	59	72	(62.2, 81.7)	-1	47	78.3	(67.9, 88.8)
指導力	60	73.2	(63.6, 82.8)	45	54.9	(44.1, 65.6)	-15	37	61.7	(49.4, 74.0)
臨機応変	54	65.9	(55.6, 76.1)	65	79.3	(70.5, 88.0)	11	44	81.5	(71.1, 91.8)
協調性	47	57.3	(46.6, 68.0)	41	50.0	(39.2, 60.8)	-6	28	59.6	(45.5, 73.6)
人前で話す能力	44	53.7	(42.9, 64.5)	44	53.7	(42.9, 64.5)	0	30	68.2	(54.4, 81.9)
社交能力	27	32.9	(22.8, 43.1)	28	34.1	(23.9, 44.4)	1	13	48.1	(29.3, 67.0)
統率力	16	19.5	(10.9, 28.1)	22	26.3	(17.2, 36.4)	6	6	37.5	(13.7, 61.2)
OA能力	6	7.3	(1.7, 13.0)	8	9.8	(3.3, 16.2)	2	1	16.7	(0.0, 46.5)

表11は、入学時と卒業時における将来、「栄養士として働く際の不安なこと」の回答割合を示している。入学時に最も高い項目は「知識のなさ」69.5%であり、卒業時にも最も高い割合91.5%を示しており、有意差が認められる。「人間関係」に対する入学時の回答割合は37.8%で、卒業時には67.1%と、顕著に有意な増加を示している。また、「人間関係」と「知識のなさ」は、いずれも極めて高い一致率を示し、「体力・精神力の自信のなさ」や「賃金」に比べて有意に高い状況が認められる。

表10 専門職に対する“魅力”および“やりがい”と専門職に必要な能力との関連

入学時→管理栄養士・栄養士 (n=56/85)		管理栄養士→管理栄養士 (n=87/156)		栄養士→栄養士 (n=40/110)	
項目	f (%) [オッズ比(95%CL)]	項目	f (%) [オッズ比(95%CL)]	項目	f (%) [オッズ比(95%CL)]
①指導力	45 (52.9) [3.3 (1.1, 10.0)]	①指導力	61 (39.1) [2.0 (0.8, 5.0)]	①調理技術	32 (29.1) [2.0 (0.7, 5.5)]
②調理技術	46 (46.4) [2.8 (0.9, 8.8)]	②コミュニケーション能力	55 (35.3) [1.9 (0.8, 4.7)]	②コミュニケーション能力	31 (28.2) [1.5 (0.6, 4.0)]
③知識	51 (60.0) [1.6 (0.3, 7.9)]	③知識	77 (49.4) [1.6 (0.6, 4.2)]	③知識	33 (30.0) [1.3 (0.4, 3.9)]

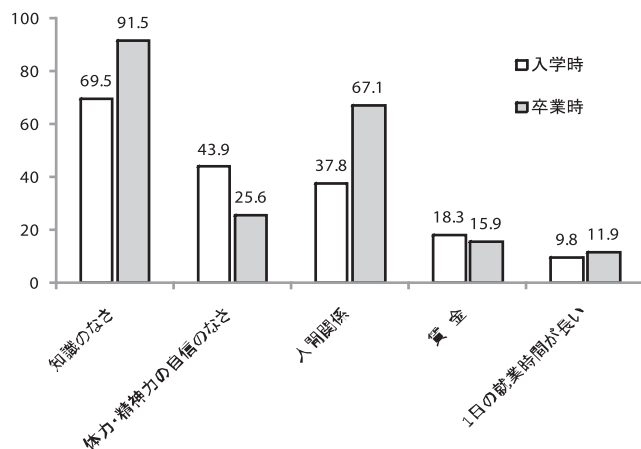


図4 入学時と卒業時における「栄養士として働く際の不安なこと」割合の比率

表11 入学時と卒業時における「栄養士として働く際の不安なこと」と教育介入との関連

項目	入学時			卒業時			増減	一致数		
	f	%	(95%CL)	f	%	(95%CL)		f	%	(95%CL)
人間関係	31	37.8	(27.3, 48.3)	55	67.1	(56.9, 77.2)	24	26	83.9 (70.9, 96.8)	
知識のなさ	57	69.5	(59.5, 79.5)	75	91.5	(85.4, 97.5)	18	54	94.7 (88.9, 100.0)	
体力・精神力の自信のなさ	36	43.9	(33.2, 54.6)	21	25.6	(16.2, 35.1)	-15	15	41.7 (25.6, 57.8)	
賃金	15	18.3	(9.9, 26.7)	13	15.9	(7.9, 23.8)	-2	4	26.7 (4.3, 49.0)	
1日の就業時間が長い	8	9.8	(3.3, 16.2)	9	11.9	(4.2, 17.7)	1	2	25 (0.0, 55.0)	

4. 考 察

今回の調査では、明確な意思を示す『ある』と回答したグループと“それ以外”の『どちらかといえばある』『どちらかといえない』『ない』と回答したグループに2分類したため、入学時の栄養士就業望者数53.7%は明確な就業希望を有しているといえる。大学生の職業に関する意識調査¹⁾では、高等学校卒業以前に職業を意識する者が、大学入学後に意識する者や、卒業後においても考えない者に比較し、「将来についてはっきりした目標をもっている」割合が高いと報告している。

そうした中であって、看護系大学の卒業生の約9割が看護師等（保健師8.0%、助産師5.7%を含む）として働くという報告⁶⁾に対し、全国栄養士養成施設における卒業生の栄養士就業率は約5割³⁾である。

本対象の卒業時における栄養士就業望者数も全国栄養士養成施設と同様に約5割で、入学時と卒業時を比較すると、ほぼ同値であった。しかし、一致率が59.1%と低かったことは、専門職の実情を深く知らずに入学したことによると推測される。大見ら⁷⁾も、栄養士養成施設校に入学する学生の4割強が、その業務内容について殆ど知らなかったと報告している。

一方、職業への魅力を感じている者の栄養士就業希望の一致率は、約6割で、これは、明確な専門職への魅力を感じて入学した者は、卒業時までその意識に揺らぎはないが、そうでない学生にとっては、2年間の教育介入により職業の厳しさなどを知り、魅力を感じなくなったものと推測される。

管理栄養士・栄養士への社会的ニーズとして、専門分野の多様化・高度化に対応することが求められるなど、専門職を取り巻く社会環境は急速に変化している。そうした状況下で、現職管理栄養士・栄養士の職業への“やりがい”意識と学生がもつ仕事への“魅力”をみると、管理栄養士の2人に1人（55.8%）が“やりがい”があると感じているのに対し、栄養士は3人に1人（36.4%）と低かった。また、学生では入学時に3人に2人（67.1%）が“魅力”を感じていたのに対し、卒業時は2人に1人弱（43.9%）と減少していた。本田ら⁸⁾による調査でも、専門職の介護職に対する「やりがいがある仕事だと強く思う」が1年次59.8%だったのが、校外実習後の2年次は44.2%と低くなっていた。これは、学生等が入学時に抱く介護職および栄養士職は、あくまでも外から眺めたイメージであって、校外実習を通してその職業の現状を知るためと推察される。

将来働く目的をみると、入学時・卒業時ともに「収入を得る」がそれぞれ8割・9割と非常に高い値であった。これは、近年の厳しい経済情勢により、収入確保が大事であるとする若い世代が増加傾向にある⁹⁾ことから伺える。厚生労働省による平成20年度雇用動向調査結果¹⁰⁾でも、20歳から24歳の転職の理由として「労働条件が悪い」の次に「収入が少ない」を挙げている。

なお、平成21年度の栄養士の平均年収は20～24歳で267.3万円、25～29歳で315.3万円¹¹⁾と、決して恵まれた労働条件とはいえない難いが、栄養士の就業先は、病院などの医療施設や乳幼児・高齢者・障害者を対象とした福祉施設、学校、勤労者の福利厚生施設、自衛隊などの防衛施設などと多岐にわたり景気に左右されない業種が多く、安定した収入が見込める職場環境であるということもできる。

短大入学の意義として、入学時と卒業時ともに最も高い割合を示したのは、「専門的知識の習得」

の約 8 割で、次いで「学歴や資格の取得」、「職業的技能の習得」、「基礎的知識の習得」であった。栄養士のように免許を必要とする職業に就くことを希望する者は、カリキュラムが職業に直結する基礎教育を受ける時点で、職業選択も視野に入れている場合が多いためと思われる。また、看護系大学の学生も、入学直後から自己の体験や周囲の期待を通して専門職としての社会化がスタートする¹²⁾と報告されている。

従って、短大は履修期間が 2 年間と短いことから、入学後の初期教育で実際の栄養士業務を体験させることが、将来の職業選択および就業希望の維持につながると考えられる。堀井らも¹³⁾ 現行の 1 年次の触れ合い実習が効果的とし、2 年次で実施することは、看護を学びたいという思いの強さを維持できないとしている。

Hinshow¹⁴⁾ は、看護職者の価値の内面化には、「現実に影響されない看護のイメージ」、「不一致」、「同一視」、「役割シミュレーション」、「揺らぎ」、「内在化」の 6 段階があるとしている。宮脇ら¹²⁾ は、1 年次はまだ「現実に影響されない看護のイメージ」すなわち、看護の理想化されたイメージと期待をもっているが、2 年次では、全体の臨地実習の時間からみれば、その占める時間数は少ないものの、看護の現実に影響を受ける「不一致」、すなわちイメージしてきたことと、現実の違いに気づく段階に移行しつつあるといえ、それが、看護という仕事に対して、《やりがいと責任》を感じる反面で《リアリティショック》を受け、不安や戸惑いを感じることにつながったものと考えたと、述べている。

職種は異なるものの、本対象を含めた、栄養士養成施設校に入学する学生等も同様な経過をたどっていると推測される。このことから、入学時に抱いていた「管理栄養士・栄養士の専門職のイメージ」とのギャップに戸惑う学生も少なくないといえる。特に、栄養士に対するイメージの変化に大きな影響を及ぼしているのは、専門職の実践の場において現実的な体験学習をするインターンシップ・校外実習である。本来、イメージと現実との「不一致」に気づく段階に移行する時こそ、教育介入によって、理想と現実はずしも一致しないが、現実を認識した上で理想に近づける努力の重要性を説き、6 段階の次のステップ「同一視」へ導く必要があると考える。

次に、現行の文部科学省のキャリア教育政策¹⁵⁾ は「責任を伴った自己実現志向」の育成を目指しているが、本対象の「自らが目指す学生像」をみると、「責任を果たす」は教育介入により入学時 47.6%から卒業時の 24.4%へと 23%減少している。

学校におけるキャリア教育推進が必要とされる背景には、少子高齢化社会の到来に伴い、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化、流動化が進み、就職・就業をめぐる環境が大きく変化していることが挙げられる。そうした中であって、若年層のいわゆる社会人・職業人としての資質・素養には改善すべき課題が多く、その一因として、精神的・社会的な自立の遅れが挙げられている。しかし、キャリア教育によって「責任を伴った自己実現志向」が高められるのは、将来やりたい仕事が決まっている生徒・学生のみであるとの報告¹⁶⁾もある。

筆者ら⁴⁾ が平成 20 年に実施したアンケート調査結果をみると、管理栄養士・栄養士に必要と思われる資質では、管理栄養士は「人間性」に、栄養士は「明るさ」に有意な関連性を示したが、管理

栄養士，栄養士，入学時の学生ともに上位には「責任感」を挙げていた。なお，学生は卒業時にも入学時同様約9割が「責任感」としていた。花木¹⁷⁾も，栄養士になるための専門教科目を半年履修した1年生，校外実習終了時の2年生，現職栄養士ともに，栄養士に必要な資質として「責任感」が一位であったことを報告している。

2008年に日本経団連が発表した一般企業における新卒者採用に関するアンケート調査¹⁸⁾では，企業が「採用選考時に重視する要素」として，5年連続で一位には「コミュニケーション能力」が選ばれており，次いで，「協調性」が53.0%，「主体性」が51.6%で，「責任感」は7位の33.0%であった。なお，本研究では「コミュニケーション能力」と「協調性」を専門職に必要な「能力」としたが，本対象も「コミュニケーション能力」を入学時に74.4%，卒業時に80.5%と高率で挙げていた。また，一致率は9割だった。「協調性」は日本経団連発表と同様に入学時57.3%，卒業時50.0%で，一致率が6割であった。

また，「クヨクヨしない」が入学時の25.6%から卒業時には47.6%へと約20%増え有意差を認め，新たに24名が「クヨクヨしない」ことを必要資質と考えるようになった。これは，インターンシップおよび校外実習，学内における教育の介入により，遅しかなければ仕事は継続できないと認識するようになったためと考えられる。

一方，専門職に必要と考える能力においては，教育介入との関連性はみられなかったが，これは，学生自身が入学目的を専門職に必要な能力である「知識や技術」の習得としていたためと考えられる。

資質・能力においては，文部科学省は中学時代からキャリア教育を導入し「社会人・職業人としての資質・能力を高める指導の充実」を図ることを基本方向として掲げてある¹⁵⁾。

溝口ら¹⁹⁾は管理栄養士・栄養士の資質向上に向けた課題として，「専門分野の多様化・高度化に 대응する教育内容への対応」を挙げている。それには，専門分野を横断して栄養評価や管理が行える総合的な能力を養う教育内容が必要であり，「専門分野の多様化・高度化に対応するエビデンスの構築」では，授業の中でエビデンスに基づく内容を学生たちに教授することだけでなく，エビデンスを「つくる」ことも必要であると述べている。さらに，栄養士養成施設として教育介入効果を上げるためには，分野を超えた教員間の連携も図らなければならない。

また，栄養士として働く際の不安なことに，学生らはインターンシップや校外実習など実際の就業現場における体験を通し，「知識のなさ」「体力・精神力に自信がない」「人間関係」を挙げていた。入学時と卒業時の比較では「知識のなさ」が69.5%から91.5%と約20%，「人間関係」が37.8%から67.1%と約30%増え，教育介入による有意差がみられた。花木¹⁷⁾も，校外実習を経験していない1年次では，栄養士になりたくない理由として「栄養士になる自信がない」が54.8%であったのに対し，校外実習後には60.0%と自信喪失から就業を躊躇する者がさらに約1割高くなったと報告している。これは，在籍2年間に「生化学」や「臨床栄養学」等の難解な専門知識の修得の難しさを知り，校外実習などを通して栄養士の業務内容のある程度把握できたことから，自分に不足しているものなどを知り客観的に自己評価するようになった結果であると推察される。

大学・短期大学への志願者総数に対する入学者総数の割合(収容力)は92%に達しており、社会ではいわゆる大学全入時代が到来したと言われる。こうした中で、学生等に専門分野の多様化・高度化に対応する知識や技術を指導し養成することが、栄養士養成施設校には求められている。それに加え、栄養士養成施設校は、高等専門教育機関(文部科学省)と栄養士養成(厚生労働省)と二つの側面があり、川延²⁰⁾は「養成教育では、各専門授業科目間の構造や相互関係が重要な意味を占める」と述べており、社会の変化に伴い、基礎カリキュラムは様々な課題に直面していると考えられる。

さらに、保健、医療、福祉等のあらゆる職域に栄養士として就職した際には、学生等は自ら主体的に考え行動する力、高度なコミュニケーション能力、高度な知識・技術を提供する力を、生涯を通して獲得していくことが期待されている。

こうした人材に共通して求められる資質・能力等を担保するには、教育の質を保証する必要があるため、そのためには、大学の教育体制の評価は不可欠なものといえる。

大見ら⁷⁾が提言する養成施設校の教員と現職管理栄養士・栄養士との連携を図り、学生に魅力を感じさせる教育介入のプログラムを構築する必要があると考える。

実務経験不足の養成施設校教員は、学生教育に情熱を持ち、真摯な態度で管理栄養士・栄養士の現実を知るために栄養士就業現場に学ぶ機会を得て、現場のニーズに適合する基礎知識と技術、人間性を備えた学生等を育成するように努めなければならないと考える。

要約

1. 「卒業後の栄養士就業希望」は入学時が53.7%で卒業時もほぼ横ばいの51.2%、一致率は59.1%であった。
2. 専門職に魅力を感じる学生は入学時67.1%と高かったが、卒業時には25%近く減少し43.9%であった。
3. 専門職に必要な能力における教育介入の関連性は認めなかったが、資質においては「クヨクヨしない」が25.6%から47.6%となり関連性を認めた。
4. 栄養士として働く際の不安としては、「知識のなさ」が69.5%から91.5%へ「人間関係」が37.8%から67.1%へ顕著に上昇し、教育介入の関連性を認めた。

これらのことから、学生は知識と技術の習得のために入学してきたことから、能力を重要視しており教育介入による影響の有意性は認めなかったが、資質においては教育介入による影響の有意性を認め、このことは、校外実習等で現職の管理栄養士・栄養士と関わることにより現実味をおび、資質の重要視への変容を来したと考えられる。

引用文献

- 1) 文部科学省 平成22年度学校基本調査
- 2) 厚生労働省 「新規学校卒業就職者の就職離職状況調査」 17年3月

- 3) 全国栄養士養成施設協会 平成19年度栄養士及び管理栄養士課程卒業生の就職実態調査の結果 全栄施協会月報, 第578号, 13-54 (2008)
- 4) 町田和恵, 大見奈緒子, 油田幸子, 東博文, 花木秀子: 新入学生及び現職管理栄養士・栄養士の職業への魅力・やりがいと職業観についての検討, 鹿児島県立短期大学紀要 第60号, 19-34 (2009)
- 5) Beness教育研究開発センター「平成17年度 経済産業省委託調査 進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—」
- 6) 文部科学省 大学における看護系人材育成のあり方に関する検討会第一次報告 平成21年8月18日 大学における看護系人材育成のあり方に関する検討会
- 7) 大見奈緒子, 花木秀子: インターンシップによる教育的効果, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 第37号, 123-139 (2007)
- 8) 本田文子, 武藤裕子: 学生の介護職意識の変化—実習経験を通して—, 静岡福祉大学紀要, 第2号, 59-65 (2006)
- 9) 朝日新聞 「収入」と「やりがい」どっちが大事? 世代間で違うやりがい 2010年1月23日
- 10) 厚生労働省による平成20年度雇用動向調査結果
- 11) 厚生労働省 平成21年賃金構造基本統計調査
- 12) 宮脇美保子, 藤尾麻衣子, 島田千恵子, 小元まき子, 寺岡三左子: 4年制大学における看護学生の職業的社会化—2年生を対象として(第2報) 順天堂大学医療看護学部医療看護研究 3, 64-68 (2007)
- 13) 堀井直子, 三浦清世美, 久米香, 横手 直美, 中山奈津紀, 青石恵子, 田中結花子, 山口直己, 足立はるゑ: 本学看護濁性の入学時における学科志望動機—志望動機を反映させた教育を探る— 生命健康科学研究所起用第, 4号, 2008
- 14) A.S.Hinshaw: Socialization and Resocialization of Nurses for Professional Nursing Practice, 139-141 (1981)
- 15) 文部科学省 2006年の文科省のキャリア教育推進
- 16) 山岡直登: キャリア教育は職業的社会化機能をはたしているか。都立高校・改革の影響「都立高校生の生活・行動・意義に関する調査報告書」, 2007年調査, 71-81
- 17) 花木秀子: 栄養士という専門職に対する職業意識, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 第25号, 161-185 (1994)
- 18) 日本経団連 2008年一般企業における新卒者採用に関するアンケート調査
- 19) 溝口景子, 管理栄養士・栄養士養成施設の現状と栄養士養成施設指導要領における留意事項について, 全栄施協会月報, 第600号, 49-62 (2010)
- 20) 川延宗之: 社会福祉教授法, 介護福祉士・社会福祉士・保母養成教育の授業の展開. 東京; 川島書店, 1-66 (1997)